

2022, 9月日本の稲作を守る会 民間稲作研究所便り

9月のお米はコシヒカリをお送りします。令和3年産最後のお米
生産者は 有機栽培。白玄米 館野廣幸さん（栃木県野木町）
今回は10月1日（土）配送予定です
御都合の悪い方ご連絡くだされば対応いたします。

全国から問い合わせ多数 有機稲作技術

農水省の出した「みどりの戦略」や「学校給食に有機米を」の活動が広がり、研究所の理事たちは講演に技術指導に全国を飛び回っております。今回は千葉県いすみ市に続いて「学校給食に有機米を」取り組んでいる千葉県木更津市の様子を五十畑理事にリポートしてもらいました。

令和4年度ポイント研修が今年も始まりました。

木更津市ポイント研修へ川俣理事と私の2名で行ってきました。

木更津市での研修も今年で4年目となり、生産者15名、面積約20haと学校給食100%無農薬米提供に向けて着々と増えて来ております。

第1回目(4月28日)では民間稲作研究所の抑草理論の中で最も重要な代かきについて実技を中心とした内容となりました。木更津市は粘土質土壌が多く、抑草という面では難しい土壌であるため、粘土質での抑草を成功させるポイントに重点をおいて研修をしてきました。

第2回目(7月15日)では生産者の疑問点や改善点を事前に伺い、質疑応答とアドバイスを行いました。また川俣理事の講義では、浅水管理に移行するタイミング等、有機水稻で多収をめざす上で必要なことをお伝え頂きました。

その後圃場を見学した際、稲の生育も良く、抑草も成功しており秋の収穫が楽しみになる稲姿でした(写真)。木更津市は日本の中でも早場米の地域で早期に水が止まるため、有機稲作でも早めに田植えをします。抑草は難しくなりますが、稲にとっては栄養成長の期間が長く取れ、立派な稲姿になるという利点もあります。このような稲を見て近所の慣行農家の方達も無農薬栽培に興味を持ち、やってみようとする人も現れているそうです。このようにして地域で有機稲作の輪が広がっていく、まさしくこれが私たちの望む姿といえます。

このように全国に無農薬の水田が増えてゆき、子供たちに安全なお米を提供することが有機農家としても一番の願いです。

今年で4年目になるポイント研修ですが、地元の特性を認識し、抑草や生育に成功している農家の方も増えてきました。次に見据えるビジョンとして、新規の生産者に指導できる体制が持続可能な有機稲作技術となると感じております。

(五十畑 匠)



最近気になる、農業を取り巻く状況 「細胞農業」

またまた新しい言葉が出てきました。「細胞農業って何？」 民間稲作研究所理事の印鑰智哉さんに簡単に説明をしていただきました。この便り・通信に載せるつもりで書かれたものではなかったのですが、印鑰さんとしては雑な文章だと気にされておられましたが、稲葉勇美子が無理にいただきました。責任は稲葉にあります。

ここしばらくの動きでとても気にしているのが「細胞農業」をめぐる動きです。

細胞培養肉などを作る技術ですが、肉に限りません。技術としても従来の遺伝子組み換え、「ゲノム編集」、合成生物などを使って、工場で食が作ることができてしまう、しかも、それが気候変動対策、食糧危機対策になるという虚偽の情報が流され、一部の動物愛護団体や環境保護に関心のある投資家までが動いてしまっています。

自民党は細胞農業推進議連を作り、年内に法案化すると行っています。韓国も承認ガイドラインを年内に作ると言っています。米国企業が年内に培養肉を市場に出すということに対応した動きでしょう。「ゲノム編集」の時はトランプ前大統領が命じてから4ヶ月で日本政府は届出制度を開始させていますので、要警戒です。

この細胞農業は健康にいいかのように見せかけているのですが、都合のいいところだけに焦点をあてて、宣伝しているだけで、実際の焦点をずらせば、大きな問題が見えてきます。たとえば、細胞を培養するために、大量の遺伝子組み換え大豆やトウモロコシ、サトウキビのモノカルチャーが不可欠になると考えられます。工場だけで完結することはないのです。自然な畜産と違い、自然循環を断ち切る維持不可能なモデルであり、その急速な拡大は現在の気候危機などの多重危機を加速させることは避けられないでしょう。

現在の多重危機（気候危機、生物絶滅危機、健康危機など）への本当の解決策は有機農業であり、アグロエコロジーですが、この細胞農業の推進によって、本来有機農業に振り向けられるべき予算が割かれてしまい、有機農業の発展の障害になっていく可能性があると考えています。

こうした偽りの技術に税金が割かれることなく、有機農業の発展が図れるようにしっかりと問題ある動きを暴いていこうと思っております。

命をなんだと思っているの

印鑰さんの文章にふれ、イスラエルの大学で、鶏のメスだけ孵化することに成功したという記事を思い出しました。卵を産まないオスは消滅させられます。オスとして孵化しないので、これも動物愛護の観点から推奨されている技術になったそうです。ふるさと納税の返礼品に使われるとか言われている養殖のトラフグも、白子が3倍ぐらい値が高いのでオスだけ孵化するように操作されているという話をしてくれた人がいます。人間も少子化時代、強い兵士の量産にこのような技術が入ってこないかしら。政治家の言動を新聞やテレビなどで視聴していると恐ろしくなります。命に対する畏敬がなくなっている風潮で、有機農業とは相容れない方向ですね。（稲葉勇美子）